

ありがとう The Last Message

藤田雅史

地下鉄の駅の階段を地上まで上りきり、夕暮れの空を見上げて、私はいつのまにか季節が変わっていることに気づきました。

「秋なのね」

胸の内で小さくつぶやくと、

「当たり前じゃん。見りゃわかるじゃん」

突き放すような台詞が耳の内側に聞こえます。

「そうね、当たり前よね」

何も考えずに薄い麻のカーディガンで家を出てきてしまった私は肌寒さよりも恥ずかしさを感じながら、コートに身を包んだ人たちの視線を避けるように道の端を歩きました。髪を揺らす風もまた、馴れ馴れしくまとわりつくような夏の風と違って、冷たくてそっけない、秋の風です。

時計を見ると、約束の時間までまだ三十分も余裕があります。どこかで時間をつぶさなければと思うものの、困ったことにビジネス街のこのあたりはまったく土地勘がありません。

きよろきよろしながら最初の角を曲がると、道沿いに見慣れたカフェのロゴマークが見えたので、私はひとまずそこを指すことにしました。

見渡せば街路樹は色づき、通行人はニットの帽子をかぶり、コンビニの入口には白い湯気の立ち上るおでんのポスターが貼られています。行き交う車のヘッドライトがやけに眩しく輝いて見えるのも、空気が澄んでいるからでしょう。確かに、見ればわかる当たり前前の秋の風景です。

「夏はとつくに終わってたのね」

今度は、何も返事がありませんでした。同じことを続けて話しかけると、たいてい二回目は無視されるものです。

夏は終わった。私は自分に言い聞かせるように、もう一度胸の内をつぶやきました。そこで何を失おうと、そこに何を置き忘れるようと、時間はためらうことなく前に進んでいく。

私はそのことを認めなければなりません。私の人生にどんなことがあろうと、季節はそれと関係なく、いつもと同じ速度で変わっていくのです。

カフェはずいぶんと混雑していましたが、二階の窓際の席が運よくひとつだけ空いていました。店の中は空調が効いて、タートルネットの人がいればTシャツ一枚の人もいたり、不思議な季節感です。

私はカーディガンを脱いで座席の背もたれにかけ、正面の窓ガラスに映る自分の姿を見つめながら、あたたかいカフェラテのマグカップに口をつけました。

ずいぶんと老け込んだ顔。中途半端に伸びた、白髪まじりのぼさついた髪。白いブラウスの襟がだらしなく傾げています。

「だつき。もつとまともな格好しろって」

彼女の声が再び耳元で私をいじめます。

「まじで恥ずかしいんだけど」

そうね、ほんと、もつとまともな格好しないと、あなたに恥をかかせてしまうわね。ごめんね。せめてネックレスでもつけてくるべきだったかしら。

私は自分が緊張しているのがわかります。これから夫と顔を合わせるのに、何も怖れることなんてないのに。

夫にも、この声は聞こえるのかしら。

ふとそんなことを考えて、聞こえないわけがないじゃない、と強く思い直しました。聞こえないわけではない。だって忘れられるわけではないもの。

カフェラテをもう一度喉に流し込むと、自然とため息が漏れます。口の中に広がる甘つたるさは、やはり秋のそれです。

秋の思い出。幼稚園のお楽しみ会、バザー、小学校の登山遠足、芋掘り、一緒に編んだ手袋とマフラー、はじめてのピアノの発表会も、はじめてあの子がコーヒーを飲んだのも秋だった。

薄っぺらく映る自分の姿の向こうには、通りを行き交う車や人が、永遠に終わらない映画のように動き続けています。交差点の信号が赤になり、青になり、また点滅して赤になる。

でもどんな景色も、私の目には、ただ映っているだけ。

私が本当に見つめているのは、ただひとつのこと。私の大切な

娘、彩香の面影です。

親よりも早く、子どもを亡くしてしまうなんて。

そんな悲劇が、まさか自分の人生に起こるなんて。

もちろんその可能性について一度も想像したことがないわけはありません。生きとし生けるものには、どんな未来の現実が待ち受けているかわからない。今日生きている人間が明日も生きていることなど、誰も保証できません。だからこそ私と夫は、いつなんどきも彼女を守ってやれるよう、注意深く、一生懸命に、娘を育ててきました。

ちよつとでも風邪をひいて熱を出せば、慌てて医者に連れて行き、寝ているときいつも布団を蹴飛ばす娘に、布団をかけ直してやるただけに夜中に何度も目を覚ます。学校の廊下で他の生徒とぶつかって怪我をしたと連絡が入れば、仕事を早退して迎えに走り、それがただのかすり傷でも、悪いウイルスが侵入しないか、傷が残ったりしないか、不安でしかたない。食べ物にも気を配り、身体に悪い添加物はできる限り与えない。雨が降ればピアノ教室や学習塾の送り迎えに必ず車を出す。それができないときはタクシーを使わせる。娘が恥をかかないよう、自分の服を買う余裕があれば娘にいい服を買ってやり、周りの子たちの相場よりも少し多めの小遣いを与える。

「ちよつと過保護なんじゃないか」とか「何もしなくても子は育つものだ」とか、夫からも両親からも、友人たちからもいろいろと言われました。

でも、たとえどんなに過剰であつても、それで娘が健康に安全に育ってくれるのなら、私はいくらでも彼女を保護したいし、人生のあらゆるリスクを回避してやりたい。

私はずつと、そういう母親をやってきました。それが母親として当たり前なことだと思ってきました。

十八歳になって高校を卒業した彩香は、大学に入学すると同時に、私たち夫婦の手を離れてひとり暮らしをはじめました。

娘が家を出た日の晩、私はさびしい食卓につく気になれず、夫とふたりで夕食をしました。

お酒を傾けながら、夫は満足そうに言いました。

「これから、あの子はどんな人生を歩むんだろうな」

「どうかしらね。わからないわ」

「まあ、でも俺たちの最低限の責任は果たしたな」

私は、そうね、と答えつつ、胸の内ではまだ、大学で変な虫がつかないか、悪い人間に影響されないか、ちゃんと毎日の食事ができるか、就職活動はうまくいくか、風邪をひいたら自分が世話をしてくれるだろうかと、なにもかもが心配でしかたありませんでした。

毎日のようにメールを送り、盆暮れに帰ってくるのが待ちきれず、何か理由をつけては家に呼び出したり、あるいは自分から娘の部屋に出かけていたり。こんなことなら、やっぱり実家から大学に通わせた方がよかったですと後悔したり。

心配性の私は、娘の部屋の方角からサイレンの音が聞こえるだけで、胸がつぶれそうな気持ちになるのです。

「そつちで救急車の音が聞こえたみたいだけど、大丈夫？」

「大丈夫じゃなかったら電話出ないから」

「そうね」

「実家からここまで何キロ離れてると思ってるの？ 用ないなら切るよ。忙しいから」

「最近ちゃんとご飯食べてる？」

「私は私でちゃんとやってるからさ。お母さん、いい加減に子離れした方がいいって」

「でも」

「とりあえず毎日メール送ってくんのはやめて」

「そうね、さすがにそれは我慢するわ」

彩香のことでようやく心を落ち着けることができたのは、無事に就職が決まり、大学を卒業してからのことです。毎月の仕送りも必要なくなり、経済的な意味でも、娘は私たちの手を離れ、自立した生活をはじめました。

社会人になった彩香は、初任給で私と夫にプレゼントを買ってくれました。父親にはネクタイとタイピンのセットを、私にはきれいな薄桃色のブランドもののポーチを。

「ありがとう。でもこれ、高かったんじゃないの？」

「そりゃ安物はあげたくないよ」

「無理しなくていいのに」

「無理したいんだよこういうときは。記念だから。そういう娘

の気持ちもわかってよ」

「そうね、ありがとう」

あんなに小さかった私の娘は、いつのまにか大きくなり、社会に生きるひとりの大人の女性に成長していました。

「もう私が出る幕じゃないのね」

「当たり前じゃん」

「大丈夫、わかってるから。あとは、あなたの好きなように生きていいのよ。私は遠くから見守るだけだから」

本心からそう思えるようになり、夫からも、ようやく子離れできたとからかわれていた、その矢先でした。

会社の健康診断で要再検査となった彩香の身体に、恐ろしい黒い影が見つかったのは。

それからの二年半の闘病生活が、長かったのか短かったのか、私はいまもよくわかりません。

思い出すことが上手にできないのです。

あらゆる記憶が断片的で、浮かんでは消え、消えては浮かぶ。喪失感。それだけが、いまの私の感情のすべて。

彩香には、もつとたくさんの時間を生きて欲しかった。少なくとも私よりも長い時間を。

でもその一方で、彩香が苦しみから解放されたことに安堵する自分もまた、ときどき顔を覗かせます。

人が死ぬことは、きれいごとではありません。

まだ若い彩香の肉体と精神は、常に怒りに震えていました。

なぜ自分がこんな目に遭わなければならないのか。いったい何の報いを受けているのか。誰も答えを知らず、誰もその問いかけの存在すら気づいてくれない。

やり場のない鬱憤は、闘病生活が続くほど、命を長らえるほど、彼女の胸にガスのように充満していきました。

私以外の人間が、例えば彩香の仲のよいお友達とか、会社の皆さんとか親戚連中がお見舞いにやってくるとき、彩香は彼ら彼女らの前で機嫌よくふるまい、笑顔さえ見せていました。

「大丈夫だよ、心配しないで。数値もよくなってるし。秋には退院できるみたいだから、そしたらみんなでまたご飯食べに行こ

うよ。たぶんお酒はダメだけどね」

でも彼らが病室をあとにし、私とふたりきりになると、彩香は途端に怒り出し、私を鋭い目つきで睨みつけ、酷い言葉を吐き出すのです。

「せつかくみんながお見舞いに来てくれてんのにさあ、なんでお母さん、そんな格好してんの。まじで恥ずかしいんだけど。だいたい、なに、その髪型。だつき。ちよつともういい加減に消えて欲しいんだけど。ふざけんよ」

私は何を言われても構いません。ただ彩香がそんな憤りや憎しみを抱えたまま、人生の終わりを迎えないといけないことが、つらくて仕方ありませんでした。

「どうせお母さんには私の気持ちなんかわからないよ」

美しい栗色の長い髪は、投薬の副作用ですべて抜け落ちました。やせ細った身体では、もう好きな洋服を着ることもできません。好きな音楽も、ドラマも映画も、みんな興味を失ってしまいました。あんなに頑張つて就職したのに、でももう会社員ですらない。そんな現実を受け入れるのに、どうしたって、娘はまだ若過ぎました。いくらそれが運命でも、認められるわけがないのです。

本当に、なんで彩香がこんな目に遭わなければならぬのか。いったい何の報いを受けてるのか。私はいえ、絶望の前になすすべもなく、ただ苦しむ娘の姿を見つめ、そばに立ち尽くすしかありませんでした。

「お母さんのせいだよ。みんなお母さんが悪いんだって。だって私何も悪いことしてないもん。お母さんが私をこんなふうに産んだのが悪いんですよ。どう責任とつてくれるの?」

私が悪いのだと彩香が感じるのであれば、それは私が悪いのです。健康ではない身体に産み育ててしまった、母親の私がすべて悪いのです。ごめんね。彩香、ごめんね。

私はとても弱くて、なさない人間です。こんなとき、子どもを叱ることもできない親です。母親失格です。だけど未来のない子どもに、いったいなにを語りかけ、論してやればいいのでしょうか。

夫はいえ、彩香を救おうと彼なりに必死でした。

でも、それはただ混乱しているだけでした。

「俺は絶対、日本で最高の医者を見つける。癌にきく治療法も見つける。認可されない特効薬があるなら、アメリカでもどこでも行く。金でなんとかなるなら、いくらでも出す」

そんなことを言ったって、父親にできることなど、何もありません。最高の医者が誰でもどこにいるのかなんて私たちにわかるはずがありません。わかったところで診てもらえるとは限りません。勝手に病院を変えるわけにもいきません。いくら奇跡を起こすと噂の民間療法を見つけてきても、彩香本人がその気にならなければ何の意味も効果もありません。お金にも残高という限界があり、そもそも何にお金を使えばいいのかわかりません。

だいたい彼は私と同じで、死を前にした娘にどんな言葉をかけてやればいいか、それさえもわからないのです。

「なんのために生きてんだ、俺は」

悪性の腫瘍が発見されてから一年が経過したところ、夫が病室からの帰りに車を運転しながら絞り出すように呟いたその言葉が、私は忘れられません。

その頃の夫は、彩香を蝕んでいる病魔の正体を、医学書を読み込むほどのレベルで理解していました。

「これから、あの子はどんな人生を歩むんだろうな」

数年前の春、そんなふうにはひとり娘の未来に目を細めていた男は、これから娘のたどる人生の道筋と結末を、ほぼ正確に知ってしまったのです。あきらめ、という言葉と付き合わなければいけない。理不尽を受け入れなければならぬ。

夫もまた、怒りに震えていました。世の中を恨んでいました。

彩香がそのかけがえのない人生に幕を下ろしたのは、二ヶ月前、夏の暑さなかでした。それは蝉の鳴き声の聞こえる午後の病室での、静かな別れでした。そこに言葉はありませんでした。ただひとつの事実が、目をとじて横たわっていました。

葬儀を終え、初七日を済ませると、夫は家に帰ってこなくなりました。失踪したというわけではなく、会社には出勤しているようでした。メールをすればいくらか時間が経ってから返信があり、電話をかければ、数日後に折り返しの着信がある。でも、彼は私の視界から姿を消しました。

夫がいまどこに住んで、どんな暮らしをしているのか、私にはわかりません。聞けば答えてくれるのかもしれないませんが、いまもって、私はそれを聞くことができません。

子どもを亡くした夫婦は、寄り添い、支え合って、その後の人生を過ごしていく。立ち直ることはできなくても、悲しみを共有し、思い出を一生の宝物にして、毎日一緒に生きていく。ええ、確かにそういう夫婦もいるでしょう。

でも私と夫は違いました。不思議なことに、私は夫の不在に、自分でも驚くほど無関心でした。高校生の彩香が門限の時間を過ぎても家に帰らないときなど、不安と怒りで気が狂いそうになるほどだったのに、夫が一ヶ月家に帰らず、どこで誰と何をしているのかわからないという状況でも、私にとって、それはどうもよいことでした。

思うのです。私たちの家族は、彩香がすべてだった。彩香のいない家庭など、成立してはいけません。

三日前、夫から電話がかかってきました。

「離婚届を出したいと思う」

「そうね」

私の心の中には、さすがにいくらかの気持の揺らぎがありました。でもそれは震度2ほどの、じつとしていなければわからない程度の揺れでした。

「それ、こつちに送ってくれるの？」

「いや、直接渡すよ。最後に、一緒にメシでも食おう」

夫は時間と場所を指定してきました。会社の近くにあるホテルのレストラン。

「わかった」

「別の店でもいいけど」

「ううん、そこでもいい」

「じゃあ、そういうことで」

「最近、ちゃんとごはん食べてる？」

「食ってるよ」

「そう、ならいいんだけど」

受話口から小さな呼吸の震えを感じ、ふと私は、夫が電話の向こうで微笑んだような気がしました。

「なに？心配しちゃうじゃない？」

少し時間があって、夫が答えました。

「いや、そうじゃなくて」

「なに」

「お前、彩香にしょっちゅう聞いてたな、それ。とっつてさ」

「そうね」

私たちにはかなしい微笑みくらいしか、もう共有できるものはありませんでした。愛娘と一緒に、いつのまにか夫婦の愛のようなものも、なくしてしまっただけです。

カフェラテをカップの半分ほどまで飲むと、私はバッグから薄桃色のポーチを抜き出し、ジッパーを開けて、普段使っている折りたたみ式の携帯電話とは別のスマートフォンを取り出します。

彩香は、あとわずか数日という自分の残り時間を悟ったとき、私にこのスマートフォンのロックを解除するパスワードを教えてくださいました。

「四桁のパスコード、私の誕生日にしといたから。これなら頭の悪いお母さんでも忘れないでしょ」

「そうね」

「メモのアプリ見て。連絡して欲しい人全部書いといたから」

「うん」

「連絡が終わったら、これ、お父さんに渡して。それでソーシヤルのアカウントみんな削除して、このスマホも解約して処分して言って言っつて。そう言えば、お父さん、みんなやってくれるから。お母さんバカだからできないでしょ。お父さんならできるから。」

絶対、処分して。本体も捨てて」

「わかったわ」

「絶対だよ」

「うん」

でも私は、彩香のスマートフォンを夫に渡しませんでした。

私はときどきこうやって、一生忘れることのない四桁の数字を入力し、娘の形見として残された言葉や写真を眺めています。はじめはぎこちなかった指先を使つての操作ももう慣れました。

私の知らない言葉や絵文字を使つた、友達とのメッセージのやりとり。数え切れないほどの食べ物や風景や友達の写真たち。そのなかにはもちろん、彩香自身が写っているものもたくさんあり

ます。至近距離で自撮りした写真、誰かに撮ってもらった写真、なかには男の子と一緒にの写真もあります。きつとどれも、生きているうちに整理することができなかつたのでしよう。これらのデーターは、娘のこの世界に対する未練そのものです。

勝手に覗くなんて、彩香が生きていたら、何と言われるかわかりません。でももう娘はいないので。決して怒られることはない。もうなじられることもない。いまこの一点においてだけ、私は現実を直視できます。

彩香には、付き合っていた男の子がいました。

二十二歳のときです。相手は三つ年下で、まだ大学生になったばかりでした。はじめてできた恋人に、娘は舞い上がっていました。

「彼が大学を卒業したら、結婚しようかな」

でも私はそれに反対しました。見せてもらった写真の男は、髪が金髪でつんつんとがっついていて、なんだかちゃらちゃらして、真面目な感じの子には見えなかつたのです。

「お母さん、関係ないじゃん」

「関係ないことないわ、親なんだから」

「親だつたら少しは応援してくれたらどう？」

「結婚なんて早すぎる。それにまだ大学生なんでしょう」

「だから卒業したら、つつつてんじやん」

「お母さんは反対」

「すっごいムカつく。もういい」

腹を立てた彩香は、しばらく私のことを避けるようにして、実家にも顔を見せなくなりました。電話しても無視、メールしても無視。

でもそれからしばらくして、ふたりは別れたようでした。やれやれ、と私は安心しました。

もしも、そのときの恋人が、ずっと彩香のそばにいてくれたら。闘病する彩香の心を支えてくれたら。もしかしたら彩香は、安らかに旅立つことができたかもしれませぬ。

役立たずの母親なんかではなく、愛する男が人生の最後に寄り添ってくれたら、あの子は運命を受け入れることができたかもしれませぬ。

最近の私は、悔やんでも悔やみきれないことばかりです。

〈ごめんさい〉

私は、彩香のスマートフォンにメッセージを打ち込みます。

〈つらかったよね。苦しかったよね。お母さん、何もしてあげられなかった。こんなことを言ったらまた怒られそうだけど、代わることができるなら、私が代わりたかった。でもできないから、そばにいるしかなかった。でもそれも、あなたにとっては邪魔だったよね。迷惑だったよね。本当は、そばにいてほしい人がいたんだよね〉

こんな文章が、もう十通も二十通も、下書きフォルダにたまっています。

〈ひとつ、あなたに報告をするね。私とお父さん、いま別々に暮らしているの。家には私が住んで、お父さんはどこか、よそにいる。今夜、これから久しぶりに会うの。でもどんなことを話せばいいかわからない。きつと、あなたのこと、まだうまく話せないから〉

言葉を並べていくうちに、本当に私は今夜、夫と会って何を話すのだろうかという気持ちになっていきました。夫はどういうつもりなのだろう。夫はなぜ帰ってこないのだろうか。よそに若い女でもいるのか。私のことがもういやなのか。家に帰ることの何が気に入らないのか。家出なのか、失踪なのか。離婚してこれからどうするのか。

〈ねえ、どうしてお父さん、帰ってこないんだろう〉

それを彩香に問いかけて、困ったような表情を思い浮かべたとき、私はひとつの答えにたどり着きました。気づいてみれば、それはあまりにも単純なことでした。

夫はただ現実から逃げ出しただけなのです。

彩香がいない世界から、彩香を思い出として認めないといけな

い場所から、一時的に逃避しているだけなのです。

夫はいま現実を認めない世界に生きている。

そして、彩香に最も親しい私という存在を失うことで、永遠に、それを認めずに生き続けるつもりなのです。

「お前、彩香にしょっちゅう聞いてたな、それ。と思つてさ」

そう電話で口にしたときの彼は、あの空気の微かな震えは、微笑んだのではない、泣いてたんだ、と私は思いました。

認めたくない現実が認めざるをえない現実とねじれるように交錯して、夫は瞬間的に、現実そのものから逃げきれなくなったのです。

妻と離婚をする。そしてもう一生、娘の母親である女と関わらない。家族の記憶を上書きしない。そういう方法をとることで、夫は、彩香を失わずに一生逃げきるつもりなのです。

なんてことでしょう。

それでは夫は救われない。私は思いました。

よそでいくら別の女と暮らしてもかまわない。家に帰つてこなくてもそれでいい。でも、夫はきちんと、彩香の死を認めないといけない。私は、夫にそれを認めさせないといけない。妻として、彩香の母親として、なにより、いちばん近くにいる彼の理解者として。人間として。

もうここに彩香はいない。私たちはそれを認めないといけない。そして、まぼろしの彩香ではなく、本当の彩香を、彩香との思い出を抱きしめて、残りの人生を生きるしかない。

そのときでした。突然、彩香のスマートフォンが私の手の中で震え、ディスプレイの表示が切り替わりました。

新着メールの通知。迷惑メールかと思い、私はうんざりした気持ちでそれを開きます。まだ契約を解除していないため、ときどき、持ち主の死を知らないどこかの誰かからダイレクトメールが届くことがあるのです。

次の瞬間、私は驚きのあまり座席から転げ落ちそうになりました。送信元の名前が、彩香だったからです。

「へちよっとお母さん、何やってんの。ひどくない？なんでお父さんに渡してくんないの？なんで勝手にスマホの中覗くわけ？ま

じで意味わかんないんだけど」

なんででしょう、これは。スマホを持つ手が震えます。誰がこんなメールを寄越したのでしょうか。身体じゅうにざわつと鳥肌が立ちました。

〈でも、お母さんの気持ちは嬉しいよ〉

私は震える指先で本文のその先をスクロールします。

〈それに、まあ、こういうこともあるかなって気はしてた。本当に捨てたかったら、自分で捨ててる。てか、もう秋なんだね。懐かしいね、ピアノの発表会とか、お母さんと一緒に色違いのマフラー編んだのとか。私は、庭で七輪で秋刀魚焼いたのがすっごい美味しかった。お母さん、覚えてる？ お父さんがなぜかホームセンターで激安だったからって七輪を買ってきてさ〉

それは、確かに彩香の言葉でした。私と彩香の、家族の思い出でした。

〈「ごめんなさい」は、私が言わなきゃいけない言葉だよね。お母さん、ごめんなさい。悲しませて、ごめんなさい。酷いことばかり言って、八つ当たりして、本当に本当にごめんなさい〉

〈私、つらかったよ。こんなことならもう死にたいって思うくらい、死ぬのが怖かったよ。痛かったし、苦しかったよ。でも、お見舞いに来てくれる友達の前では大丈夫でいたかった。安心させたかった。だけどそれが余計につらくって。そんな気持ち、お母さんにしかぶつけられなかった。もう二十五歳なのにね。二十五つて、もういい大人のはずだよ。だけど、お母さんのそばにいと小さな子どものままでいられたんだよ。ていうか、私にはお母さんしかいなかったんだよ〉

〈お母さんに酷いこと言いながら、私、心の中でずっと謝ってたよ。お母さんごめんね、お母さんありがとう、って。変だよ

ね。滅茶苦茶だよ。ありがとって思いながら、バカとか消えろとか言ってたなんて。でもお母さんにありがとって一度でも口にしたら、あきらめるとこ見せちゃったら、本当にみんな終わっちゃう気がして

隣に座っていた若い女の子が、大丈夫ですか、と声をかけてくれました。私は肩を震わせて泣いていました。涙で顔がぐちゃぐちゃでした。大丈夫よ、ごめんなさい。何でもないの。

私は、彩香を看病しながら、ずっと同じことを思っていました。ありがとなんて言葉を聞くよりも、永遠にこのまま悪口を言われ続けていたい。彩香の心の中の黒々としたものを、これからもずっと、みんな私が受け止めていたい。なのに。なのに。

〈でもね、今だから言えるよ。お母さん、ありがとう〉

〈お父さんとお母さんの娘に生まれて、私は幸せだったよ。本当だよ。ねえ、お母さん。最後にお願いがありません。お父さんを助けてあげて。それができるのは、お母さんしかいないんだよ。一生のお願いだから、助けてあげて〉

隣の女の子が何も言わずに、ガーゼ地の白いハンカチをそつと差し出してくれました。

ありがと。ごめんなさい。

大丈夫よ、私の涙なんかで汚すわけにはいかないわ。

まっすぐに澄んだ瞳をした彼女は、彩香と同じくらいの年齢に見えました。これから恋人とデートでしょうか、かわいいワンピースを着て、お化粧も髪もきれいに整えていました。ハンカチは柔らかく、清潔で、秋の匂いがしました。

私は皺だらけの自分の手で彼女の手を包むようにそれを押し戻し、かろうじて笑顔をつくってから、自分のバッグからハンドタオルを取り出し、涙を吸い込ませました。彼女は安心したように軽く微笑み返すと、席を立てていきました。

時計を見ると、もうすぐ夫との約束の時間です。

私は彩香のスマートフォンを電源を切りかけ、ふと思い直して、もう一度、メッセージの画面を開きました。

わかってる。大丈夫だから。お父さんは、私が助けるから。これからちゃんと家に連れ戻すから。

もうこれで最後にしよう。私はこれからも、彩香の思い出とずっと一緒に生きていくけれど、このスマートフォンは二度と開かないようにしよう。

そう心に決めて、短い返信を打ち込みます。彩香と同じように、私もまた、最後まで口にできなかつた言葉を。

〈彩香、ありがとう〉



※この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とはいっさい関係ありません。
※本作品に関するすべての権利は著者本人に帰属します。また、無断での複製・改変・放送・上演等は固くお断りいたします。